

バウムの表面、表面としてのバウム

鶴田 英也

(神戸学院大学)

1、バウムの表面、表面的なバウム

バウムテストに関わってきてずっと気になっていたことがある。それは、バウム（バウムテストにおいて描かれた樹木イメージのこと。以下バウムと呼ぶ）においてなぜ幹ばかりがその「表面」に着目されるのだろうかという点である。幹に描かれる描写はすべて、幹の内部ではなく、模様や傷やうろといった表面として解釈される。一方、バウムの樹冠や枝や根については、その表面に着目されることは幹と比べるとかなり少ないと言っていい。

ただし、バウムにおいて表面に類するものを他に挙げることはできる。一つは地面線であり、もう一つは包冠線である。言うまでもなく地面線は大地の表面を、包冠線は樹冠の表面をそれぞれ二次元で描写したものである。そして両者に共通するのはその境界性である。地面線は地上と地下の境界であり、包冠線は樹冠の内と外、ひいてはバウムの内と外の境界である。

そして表面ということ言えばもう一つ思い浮かぶのが、いわゆる“表面的なバウム”である。特にASDの人が描くバウムが表面的と言われることが多く、まるで箱庭で木のアイテムを「置く」かのように描かれた、輪郭が閉じられ、根つき感や奥行き感の希薄なバウムを筆者も何度も見てきた。田中(2010)は発達障害のクライアントが『「内面」や『深層』のない『表面』や『表層』だけの『張り子』の世界を生きている」と論じているが、河合(2023)が論じている象徴性の対極としての「直接性」もまた、表面的とされる発達障害の特徴を別の視点から表現したものと言えるだろう。そして表面性を特徴とする発達障害は内面や深層を前提とする心理療法にとっては一つの挑戦と受け止められ、心理療法の更新が意欲的に進められている。

となれば、深層や象徴性を前提とする投影という

心の働きをよりどころとする投影法の一つであるバウムテストもまた、同様の更新を求められていると言えるのではないだろうか。詳細は後述するが、例えば筆者がバウムテスト研究でずっと注目してきたのは、深層心理学を前提とする投影法において、内面がその姿を紙面に表わすところの、表面としてのバウムイメージであったり、あるいは地面線で示される地面であったりといった、いわゆる表面であったとも言える。そして、表面よりも包括的な概念として界面があるが、表面科学の領域では界面とは固体、液体、気体がそれぞれ接する面であり、固体と気体間の界面を表面と定義するようだが(板倉、2013)、バウムにおいても筆者が注目してきたのは、内面と外面、意識と無意識が面し接する、いわば界面としてのバウムイメージでもあったと言える。本論では今一度、バウムの表面、表面や界面としてのバウム、そして表面的なバウムに向き合い、現代におけるバウムテスト、バウム理解の方向性を模索していきたい。

2、表面をめぐる思想

表面という概念が現代の日常にいかに浸透しているかは、それがそのままタブレットPCの商品名になったり、現代人が絶えずスマホやタブレットといった端末の表面をタップしたりなぞったりしていることから明らかである。身体においても、身体がファッション化していると言っていいくらい、たとえばムダ毛の処理が男女問わず普通になって体装をつるつるにしたり、またタトゥーのような皮膚装飾やネイルアートが日常化するなど、表面に関わることに事欠かない。現代は表面がますます注目される時代であり、また表面性こそが現代を象徴すると言えるだろう。

そうした現代について「皮膚の時代と言うべきだろうか」と書いた美学者の谷川(1994)はその著書

『鏡と皮膚』の中で、伝統的なプラトニズムである本質 *essentia* と実存 *existentia* の二元論や表象 *representation* の論理を脱構築する実存主義というのは、実存という「外側に出ている人間のありよう」がすべてであるという実存一元論であると述べ、その実存の代表とも言える鏡と皮膚について美学者の立場から論じている。その谷川が実存一元論の有力な根拠の一つとして挙げている発生論については、後にも取り上げる精神分析家アンジュー (1985/1993) の記述が詳しい。すなわち、

「原腸胚の段階において、胚は一方の極から『陷入』することによって外胚葉と内胚葉の二つの胚葉に分かれる。…あらゆる動植物の被膜は、例外を除き内膜と外膜の二層からなっている。…この外胚葉から皮膚（感覚器官を含む）と脳とが同時に形成されるのである。…脳と皮膚はどちらも表面なのである。内部表面である大脳皮質は、外部表面である皮膚の媒介により外部世界と接触を持つ。」（傍点は筆者）

要するに元は同じ一つの表面が「陷入」によって内と外に分かれて表面の二層性を構成するというものであり、これが「襞」というイメージにもつながっていく。こうした理解が、心身二元論が主流だった西洋が例えば様々な心身症を理解していく独自のプロセスだったのだろうし、一方で心身一元論に支えられている例えば鍼灸医学などの東洋医学にとっては、すでに自明のことだったのだろう。

いずれにせよ興味深いのは、谷川がヨブ記のサタンによって「悪しき腫物」に覆われてしまったヨブから現代におけるヘルペスやエイズまでを挙げて、「魂の病いは皮膚の崩壊というかたちで現れるかもしれない」と述べ、皮膚と魂との「のびきならない関係」に言及しているところである。こうした表面の崩壊という徴候に際して谷川は、安易に「本質」や「内面」に還ることで逃走しようとせず、「表面」や「皮膚」に敢然ととどまり続けなければならないということを強調している。これは臨床的にも大変示唆に富んだ主張だと言える。

次に心理学、特に深層心理学において表面や表面性、表層がどのように論じられてきたか、言うなれば「表面心理学」について概観しておきたい（東畑 (2014) は「表層の心理学」「心的表層論」という言

葉を用いている）。東畑 (2015) が「深層心理学にあって、『表層』は脱価値化されやすい」と指摘しているように、表面というのはどうしてもネガティブに受け取られがちであり、浅薄で、中身がなくて、見てくれだけで、深みがなくて、嘘っぱちで、うわべだけで、表と裏があって、とネガティブな形容は枚挙にいとまがなく、これだけでもう表面はボロボロと言っていいかもしれない。それは、フロイトやユングに始まる深層心理学が、無意識、深み、奥行きといった内面に注目してきたことからしても、ある意味当然のことと言えるのかもしれない。しかし、表面と内面という二層構造を前提とするのもまた深層心理学であり、表面と内面の関係は表面あってこそ内面、内面あってこそ表面という弁証法的な関係にある。確かにフロイトもユングも早くから心の表面についても言及しており、それらを説明するものとしてはたとえばフロイトについてはアンジューの『皮膚－自我』(1985/1993)、ユングについては大場 (2000) の『ユングの「ペルソナ」再考』といった論考が代表的なものとして参考になる。それらを見ると、表面という概念は臨床心理学においても新しく古いテーマだったということに改めて気づかされるとともに、現代の発達障害の臨床や研究の潮流も考え合わせると、改めて表面という概念について再検討する必要性を感じる。そしてそうした息遣いを現代において最も感じるものとしては、東畑の一連の論考 (2014a、2014b、2015) が挙げられよう。

3、精神分析学における表面 皮膚－自我

アンジュー (1985/1993) によるとフロイトは、自我－超自我－エスという第二局所論において表面や界面としての自我の概念を構築していく。意識というものは心的装置の表面であり、しかもその表面は外的知覚と内的知覚の双方を知覚する界面的なものである。そしてフロイトがそこで触覚について触れていることにアンジューは注目する。触覚においては触れることと触れられること、すなわち主体と客体の同時性が生じるのであり、その再帰性や可逆性こそが自我を形成するものだということは、ラカンの鏡像段階論も示してくれている通りであり、す

なわち鏡に映ってこちらを見ている他者が自己として統合されていくとされる。しかしその見る見られるという視覚の同時性よりも触覚の同時性の方がよりプリミティブなのであり、その体験の舞台となる、母親に抱かれる赤ん坊の皮膚、すなわち身体 of 表面における体験にフロイトはまさに身体-自我の芽生えをとらえており、それこそがアンジューの皮膚-自我の概念の基盤となっていると言える。

すなわち子どもにとっては、母親に触れられ抱かれる面が自己愛的な外被、自身と母親との「共通皮膚」という幻想として形成される。そしてその共通皮膚が生物学的な皮膚同様の透過性と非透過性（≒柔らかさと硬さ）でもって、その中に包まれ守られているという安全をもたらし、同時に内外の交流による欲動充足をもたらしながら、まさにその皮膚-自我において自我が基礎づけられていく。さらにアンジューは、子どもが自身に固有の皮膚-自我を形成していくための条件として、界面や母親の周囲の内面化を挙げている。言うなれば表面の内面化である。しかしそれは共通皮膚が剥ぎ取られる体験であり、そこに当然伴う抵抗や苦痛の克服が求められる。

また、そもそもこの共通皮膚という幻想への到達に失敗している例としてアンジューが挙げているのが、タスティン（1972/2005）の一次的自閉症と二次的自閉症である。前者は皮膚-自我の欠如した、蛸のような「軟体動物型の自我」であり、一方後者は「甲殻に覆われた自我」であり、特に後者については、「甲冑のような外被、ぶ厚い皮膚」「保護障壁は持つが、包み込む表面や界面は持たない」と説明している。界面とは別々のものが接する場であり、界面としての共通皮膚はそもそもの分離を前提としているのだが、自閉症においてはその分離自体、すなわち出生が否定されており、「子宮内外被を人工的に延長」させている。

ここで興味深いのは、ユング派分析家の田中康裕（2010）も、発達障害のクライアントが『内面』や『深層』のない『表面』や『表層』だけの『張り子』の世界を生きている」その背景には、「いかんともしがたい産まれがたさ」「永遠の胎内在留願望」があり、その状態を「心的未生」（田中、2017）と表現していることである。さらに、タスティンの言う

二次的自閉症の中でも特に高機能と言われたり軽度の発達障害のクライアントの心理療法に限ってとは思われるが、重要なのは、セラピー自体が子宮にならないよう、セラピストが自らの主体をぶつけ、彼らの発達障害的な表面的なあり方を「剥き出し」にすることによって、彼らが「他者との、あるいは世界との本当の意味での接点、あるいは接触面」をもつことができるようになることであり、「まだ粘膜的ではあっても借り物ではない自前の『皮膚』を作る」ことだと言う。まさに共通皮膚、皮膚-自我を生成していくプロセスだと言えるのではないだろうか。

4、分析心理学における表面 ペルソナ

ユングのペルソナについては、大場登が『ユングの「ペルソナ」再考』（2000）の中でかなり包括的に整理した上で再検討している。まずはユングの『自我と無意識の関係』（1928/1984）における記述を挙げる。

「ペルソナは集合的な心の仮面にしかすぎない。個性というものがあのかのように見せかける仮面なのである。」

「ペルソナは、『一個の人間が表面的にどう見えるか』ということについての、個体と社会とのあいだの妥協の一所産である」

「個性化の目的は、一方ではペルソナという偽りの覆いから、他方では無意識のイメージの暗示力から自己を解放すること、それに他ならない。」

ユング自身が内向的で、個性化も「中心」を目指すとなれば、外界への構えとしてのペルソナがネガティブな扱いを受けることはやむを得ないことでもあったろうが、大場によるとさらにポスト・ユングアンにも「ペルソナ=仮面」論が引き継がれることとなり、結果ペルソナが「かたよった貧弱な内容のニュアンスを付されてしまった」。そこで大場は、「ペルソナ=仮面」論とは距離を取って、今一度「個体と社会との妥協」というユングの最初の定義に還って、ペルソナを再検討することに取り組む。その際、これもどうしてもネガティブなニュアンスが付されがちな「妥協」（Kompromiss）という訳語について、よりポジティブな「折り合い」に変えて

いる。筆者自身も、分析心理学においてペルソナがアニメやアニメスやグレートマザーと並んで同じように元型の一つとして挙げられていることにかねてから違和感を覚えていた。筆者自身の中にも「ペルソナ＝仮面」イメージが根強かったのだろう。しかし大場の論考がそれを払拭させてくれた。

まず大場が確認したのは元型としてのペルソナである。ユング自身はペルソナを元型とは考えなかったが、やはりペルソナは元型として位置づけられる。というのも、大場いわくペルソナは「まさに人間が他者・周囲・社会と接するときの典型的な『型』そのもの、すなわち『元型』であり、それは人類という普遍的レベルにおいて共通であるとともに、各文化によって色づけられた、対人・対社会的な『形式』『座標軸』である」。そして他の元型と同様に、それは様々なイメージで表されるのだが、大場が自身の臨床経験から挙げているのは「仮面」「顔・面」「衣・靴」「髪形・化粧・メーク・匂い」「雰囲気」「皮膚・肌・保護膜」「殻・皮」「名前・名刺」「言葉遣い」「立ち居振る舞い」「器・カプセル」「表紙・畳表」「家、特にその『表口』」「窓・簾・葦簾^{すだれ よしず}」「ブラインド・シャッター」といった実に豊かなイメージであり、逆にペルソナを一つに固定してしまうとペルソナの本質理解を妨げてしまう。

また、ペルソナは「個の要請と周囲・外界・社会・集合意識からの要請との折り合い」として成立するものである。「折り合い」という言葉自体すでに両面性を備えていると言えるのだが、ペルソナは外界とのかかわり、ゼーレは内界とのかかわりというように分けて考えてしまい、さらにペルソナがゼーレとのつながりを失ってしまうと、ペルソナは硬化して仮面化してしまう。逆に大場が示したのはまさにゼーレといきいきとかかわっている様々なペルソナ・イメージであり、その意味で大場はペルソナ・ゼーレ元型という表現こそがよりふさわしいと述べている。そこから大場が提起するのは、「境界面」としてのペルソナの再定義である。内界と外界は本来別個のものではなく重なり合っており、それがペルソナの表裏を形成しているのである。そしてこの「境界面」としてのペルソナは、分け隔てるという「構造的側面」を持つと同時に、内界と外界が接触し折り合うその内容を「顔」「面」として形成する

という「内容的側面」も持つ。また「透過性と隔壁性」「接触と境界」、「かかわりと仕切り」といった両義性をもつものとされる。ペルソナ元型のこうした両義的な特徴を説明するのに、大場もまたアンジューの皮膚－自我と同様に皮膚の特性を用いているところは、非常に印象的である。

筆者は大場のこのペルソナ論を理解すればするほど、ペルソナの元型性だけでなく、諸元型やイメージのペルソナ性ということにも注目せざるを得ない。というのも、内界と外界との折り合いの内容を見せる境界面という特徴は、ペルソナに限らずすべての表象やイメージそのものを支える存在パターン、根源的な型であると思われるからである。逆に言うと、ペルソナを表象する様々なイメージはあるけれども、そうしたわれわれが直にかかわることのできるイメージのペルソナ性にももっと注目してもいいのではないだろうか。そして心理療法の目的は、いかに活き活きとした豊かなペルソナを形成していけるかということである、と言っても過言ではないのではないか、という気すらしてくるのである。実際東畑の事例（2014）でも、発達障害のクライアントの「表面だけのイメージ」が、心理療法を通じて奥行きを生じ、「界面」となっていくプロセスが論じられている。

5、表面、界面としてのバウム

ここで、筆者のこれまでのバウムの表面に関する論考を今一度ふり返っておきたい。まず筆者は、バウムとは投影という心の働きを通じて描き手と内面が出会い対話をする、その内容が紙面で具現化されたものであると論じた内容を図1に示したが（鶴

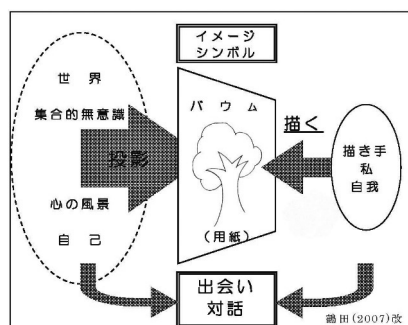


図1

田、2007)、バウムイメージが境界面として表現されており、かつ大場の論じたペルソナの特性と重なる部分がかなりあることがわかる。

次に筆者は、弘法大師の杖立伝説をヒントに、内面との関わりのプロセス自体が木のイメージで表象されるものであり、描画投影法においては杖立伝説のごとく言うなれば紙面に木が生えるのであり、さらにバウムテストではその木が二次元に転換されて紙面に描かれるのだと考えた(鶴田、2014)(図2、図3)。

また筆者は、バウム研究から派生して、心理学的に根づくということについて、日本思想の「自然(じねん)」の二面を表わす「みずから」と「おのずから」の相克という観点から考察した(鶴田、2020)。「みずから」という主体の動きが行き詰ったその底、面においてこそ、絶対的他者としての「おのずから」と出会い、それに貫かれることによって「みずから」「おのずから」となる、それが心理学的に根づくということであるということを論じ、図4を示した。そこでも決定的な要素となっているのが、両者が出会う面である。

これらを整理すると、要点は大きく二つにまとめられると思われる。一つは、バウムは描き手と内面が出会う「界面」だということである。もう一つは、その両者の出会いと対話は、描き手が紙面=内面に

向かい合う「対峙のパースペクティブ」におけるものであり、それが二次元に転換されて描かれるのがバウムであるとするなら(図3)、そのバウムの立ち姿=垂直のパースペクティブには対峙のパースペクティブも重ね合わされているということである。これが、描かれる対象が“木”だからこそそのバウムテストの特徴ではないだろうか。

これらを踏まえて次に、発達障害に特徴的ないわゆる表面的なバウムが、われわれのバウム理解にどのような更新を求めているのかを検討したい。普段われわれがバウムに奥行きを感じる場合、つまり対峙のパースペクティブにおいて表面に表象される「内面」の存在を感じられるのは、その存在感、匂いのようなものを、垂直のパースペクティブにおけるバウムの立ち姿から感じ取っているからだと思われる。だからこそ、われわれは表面や表象としてのバウムの立ち姿の分析に専念すればいいということになる。

一方、奥行きを感じられない表面的なバウムというのは、その立ち姿に対峙のパースペクティブを感受できないということになるのだが、より正確に言うと、バウムにおいて二つのパースペクティブの重なりを見出せない、ということではないだろうか。それはどのようなバウムか。思い出されるのはまず、ゲームに出てくるようなアイコンや記号のようなバウムであろうか(実際、描き手がそれを連想して描いたと解説してくれることもある)。個人的な感触からすると、全体の輪郭が閉じているバウム、そして地面線描写のない、浮いたようなバウムであり、まるで箱庭に置かれた木のアイテムのような、

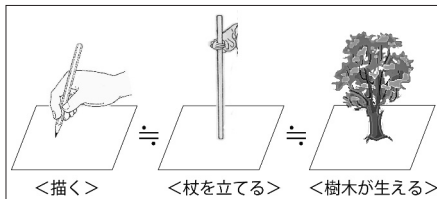


図2

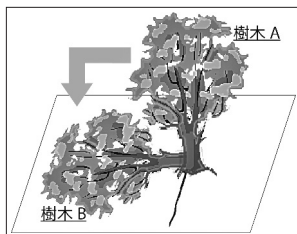


図3

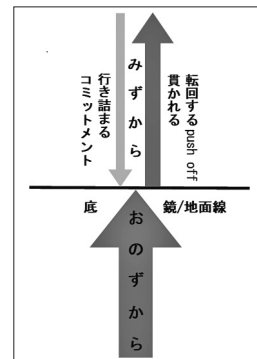


図4

根づきのなさ、浮遊感が特徴的と思われる。つまり、対峙のパースペクティブにおいて表面的と感じられるバウムは、実際には垂直のパースペクティブにおいてもその簡素さや淡白さを感じさせるバウムなのである。それがバウムの面白いところであろう。いずれにせよ、木は紙面に立っておらず、いわば横たわっている状態である。となれば、バウムを描くことすなわちそこに木が立つこととは限らないことを想定し、それ自体が臨床的に有意義なサインであると認識することが、現時点でわれわれのできる更新の一つなのかもしれない。

6、バウムの表面

ここまで表面的なバウムについて論じてきた。次にバウムの表面について考えたい。前述したように、幹の模様、傷、うろなどはすべて幹の表面についての表現である。なぜ幹ばかりがその表面に着目されるのか。まずは特にバウムにおける幹と樹冠についての解釈の違いからおさらいしておきたい。コッホ（1957/2010）によると、幹とは「中心」であり「支え」であり「骨格」であり、「衣服」に喩えられる樹冠とは対照的である。また幹の表面については、「樹皮」と称され、「内界と外界、わたしとあなた、私と周りの世界との間にある接触面」と解されている。またボーランダー（1977/1999）は、樹冠は人間関係や環境への態度や構えが表現されているのに対して、幹は「情緒機能との内的関係」を明らかにする部分であり、また基本的な生命エネルギーが流れる水路であると理解している。そして樹皮については情緒面の「隠蔽」、「装甲」、「保護」といった理解を示している。

またアヴェ＝ラルマン（1996/2002）については、幹の両端部分を二つの重心ととらえるなど、その解釈仮説がおそらくもっとも有機的、力動的かつ多面的であるため、一概に樹冠がこうで幹がこうだとは読み取れない難しさがある。幹下端については Geborgenheit 被包性、すなわち共同体等に属していること、守られていること、根拠づけられていることといった根源的なテーマが関係していると言われる。一方幹上端は「心臓」と称される中心性を有し、ここからの人格発展、自己展開が表現される領域が樹冠とされる。

興味深いのは、幹と樹冠の双方について、その境界や表面に言及していることである。まず幹は、空間象徴的に、左の幹線は内界との境界を表わし、右の幹線は外界との境界を表わすとされる（垂直のパースペクティブ）。また幹中央部は「表面」として見る者に語りかけてくるようだと述べられている（対峙のパースペクティブ）。だが、幹線＝輪郭線のタッチが柔らかであるか固いものであるかといった点も、幹表面に当たる樹皮の触感や陰影などもすべて、共同体、社会における適応性、共存性、そしてそれを感じる感受性を示すものとされており、結局のところアヴェ＝ラルマンは幹線も幹表面もすべて立体的に境界面としてとらえていることがわかる。もちろん、幹の太さや長さ、形にも着目するのではあるが。

一方樹冠は、自他の相互交流のプロセス、そしてそれによる人格の発展が垂直のパースペクティブにおいて展開される領域である。ただし、樹冠の境界、すなわち包冠線にあたるところについては「樹冠の皮膚」(!)と称し、その透過性と非透過性に言及している。これも興味深いところではあるが、垂直のパースペクティブであることには変わりない。

以上をまとめると幹と樹冠の違いが見えてくる。すなわち樹冠は、衣服が内面を表わすように、人間関係やそこにおける自己展開が「直接的」に表現される領域であり、そこには基本的には垂直のパースペクティブしかなく、表面＝内面であり、表面と内面の区別はない。例外としては、内面が表現されない表面が描かれた場合、つまり表面的と言われる場合が挙げられよう。例えば、実が枝に着いておらず、クリスマスツリーのオーナメントのように外から着けたような感じになっていたり、枝がなくかつ包冠線が幹上端部分でも閉じているようなバウムが想定される。そしてそれにはさらに二つの可能性が考えられる。一つは防衛的に内面を覆う、隠そうとする場合であり、もう一つは内面が十分に形成されておらず表面だけになっている場合である。

一方幹については、太さや長さや形といった垂直のパースペクティブと、表面、境界面という対峙のパースペクティブが同時的にあると考えられる。幹表面は内界と外界が接する界面であり、そこには表

面と内面の二層構造が想定される。幹表面の傷やうろや陰影はそれによって、何かがあったこととしての内面、何かが感じられたこととしての内面にわれわれの思いを馳せさせる。対峙のパースペクティブはそうしたメッセージ性に向き合うのである。

佐渡・坂本・岸本（2014）は、バウムテストの集団法の方が個別法よりも幹表面の表現に有意に多かったことを明らかにし、その要因としては被検者が周囲からの影響を受けたり感じたりした結果であることと描画時間を挙げている。これにしても2本の幹線の間の表現は初めから幹表面と解釈されているが、その前提にあるのはやはり幹における表面と内面の二層構造、そして内面と外面が接する界面としての幹表面という認知であろう。

このような前提となる認知の根拠として挙げるとすれば、まずは樹木の幹というものが持つ立体性であったり実体的な固さ、確かさだろう。何よりも樹皮は、人の顔に刻まれるしわのように、その木の歴史や感受性、すなわち木の内面性を表象するものである。そしてもう一つは、幹は杖立伝説のごとく、バウムテストにおいて描き手が内面と対峙し内面を感じるための道具である鉛筆を象徴するものであり、そこにはエネルギーの流れがあるということではないだろうか。それゆえに内面を感じさせずにはおれない箇所なのではないだろうか。

7、バウム事例再検討 幹模様とうろの意味について

最後に、これまでの考察を踏まえ、以前提示したバウム事例について新たな検討を加えたい。筆者は以前、腎疾患を抱え透析治療を必要とする男性で、職場の人間関係でうつになった事例の2枚のバウムの変化について検討した（鶴田、2014b）。

1枚目（バウム①）は初回時に描いてもらったもので、ひととき濃く描かれた幹はまるで“通路”のようであり、全身の血を浄化して入れ替える透析治療を受けているクライアントの身体イメージと重なるとともに、様々なことにひっかからずにまさに通路のようにスルーさせていく“無私性”のようなものによって、周囲との調和を図ってきたクライアントのあり方を感じさせた。そしてもう一つ印象的だったのが幹と同じ濃さで唯一閉じた形で描かれた

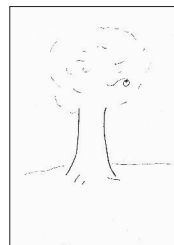
一つの実だった。

そして一年半後に描かれたバウム（バウム②）では、筆圧が一定となり、幹は太くなり、弧を描く地面線からは浮いており、幹には模様とうろが描かれた。最も印象的だった変化はやはり幹であり、幹模様とうろが描かれたことと筆圧が一定したことによって、初回時の“通路”や“無私”の印象はなくなり、逆に“私”としての中身が生成され、またその分周囲とは幾分浮かざるを得なくなっているという印象を受けた。

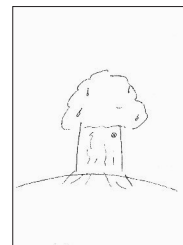
通路であった幹に模様が描かれたことについて、当時の解釈としては、スルーするのではなくクライエントなりに感じ、傷つき、ひっかかる“身”が生まれたと考えた。その解釈自体は今も支持できるが、本論に即してさらに付け加えるとするなら、そうした“身”の生成は感じる“面”があってこそであり、それを証明するのが幹表面の描写ではなかったかということである。表面が生成されるということは内面が生成されることとイコールであり、それが表面の「奥行き」であったり“身”を意味するものではないだろうか。

その意味で、1枚目で描かれた実と2枚目のうろとの関係も非常に興味深い。そもそも一見何の関係もないようにみえる実とうろの関係について考える機会を与えてくれたのも本事例なのだが、両者に共通するのは自他、内外の関わりや産物だということであり、違いについてとりあえずは、そのポジティブな表現が実であり、ネガティブな表現がうろであるとも言えるのかもしれない。しかし当時はまだ感覚的なものにとどまっていた以下の記述は、今回の論考によってある程度は理論づけられたと言てよいのではないだろうか。

「筆者には、一枚目の唯一閉じていた『実』が、



バウム① 初回時



バウム② 一年半後

この閉じた『身』あるバウムへと変容を遂げたのと同時に、うろへと象徴化し、このバウムにとって生きている証しや拠りどころとなっているような気がしてならない。」

バウムのうろについては心的外傷や子宮を象徴するものという解釈がある中で、筆者はかねてよりバウムのうろは、そこで枝が折れたり切断されたりしていることもあって、人間の「へそ」に類するものとしても理解できるのではないかと考えてきた。ドルト (1994) の「臍帯去勢」の考え方によると、だれもが人生の最初に体験する去勢は生まれることであり、それは実際には臍帯の切断という形で実現される。そしてそれによって生まれる「へそ」は他と違って唯一閉じられた器官であるがゆえ、そこに欲望が生じることは禁じられており、すなわち子宮に戻ることは禁じられ、「生きる」という掟に従うことが求められる。その意味でへそは「生きる」根拠、土台となる。

それは、杖立伝説において杖が突き当たる地面、あるいはバウムテストにおいて鉛筆が突き立てられる紙面こそがそこに木が生える、描かれる根拠、土台となることと、基本的には同じことではないだろうか。すなわち、木が立つ、その根元の場所こそがへそ＝オンファロス（ギリシャ語で“へそ”、“世界の中心”）なのである。そして本事例のバウムに描かれたうろは、そのへそを垂直のパースペクティブにおいて示すと同時に、対峙のパースペクティブにおいては生きる根拠が内面化されたということを示している、ということではないだろうか。

引用・参考文献

- Avé-Lallemant, U. (1996). Baum-Tests. München: Ernst Reinhardt Verlag. (渡辺直樹・坂本堯・野口克巳 (訳) (2002). バウムテスト—自己を語る木：その解釈と診断 川島書店)
- Bolander, K. (1977). Assessing Personality Through Tree Drawings. New York: Basic Books. (高橋依子 (訳) (1999) 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版)
- Didier Anzieu (1985/1993). Le Moi-peau: Paris. (福田素子 (訳) (1993) 皮膚—自我 言叢社)
- Françoise Dolto (1984) L' image inconsciente du corps, Seuil. (榎本譲 (訳) (1994) 『無意識的身体像 1・2 子供の心の発達と病理』、言叢社)
- 板倉明子編 (2013) 表面科学の基礎 共立出版
- 河合俊雄 (2023) 夢とこころの古層 創元社
- Jung, C. G. (1928) Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten Darmstadt, Reichl (松代洋一・渡辺学 (訳) (1984) 自我と無意識 第三文明社)
- Koch, K. (1957) Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel. Dritte umgearbeitete Auflage. Bern und Stuttgart: Verlag Hans Huber. (岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房)
- 大場登 (2000) ユングの「ペルソナ」再考 創元社
- 田中康裕 (2010) 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社
- 田中康裕 (2013) 大人の発達障害の見立てと心理療法 創元社
- 谷川渥 (1994) 鏡と皮膚 ポーラ文化研究所
- 鶴田英也 (2007) 心理臨床の具体 (3) バウム (皆藤章編『よくわかる心理臨床』 ミネルヴァ書房 118-129)
- 鶴田英也 (2014a) バウムのコスモロジー (4) 杖立伝説とバウム—深層心理学的視点からのアプローチ 神戸女学院大学論集 61(2) 181-194
- 鶴田英也 (2014b) バウムという投影法 —共感するバウム— (角野善宏他編『心理療法における「私」との出会い—心理療法・表現療法の本質を問い直す 創元社 136-145)
- 鶴田英也 (2020) 「根づきの心理学」 その論理性と動きに着目して 箱庭療法学研究 Vol.33 No.1 65-74
- 東畑開人 (2014) 表面だけのイメージ、表面のイメージ、その奥行き 発達障害のイメージ論 箱庭療法学研究 Vol.27 No.2 39-49
- 東畑開人 (2014) 「覆いをつくること」の二種 精神病患者とのありふれた関わり意義 心理臨床学研究 Vol.32 No.4 437-448
- 東畑開人 (2015) 「オモテとウラ」の裏 日本語臨床概念再考 心理臨床学研究 Vol.33 No.4 345-356
- 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史 (2014) 個別法と集団法のパウムテストにおける幹表面の表現の比較 臨床心理学 Vol.14 No.2 256-263